

# 『イエス様の招き』

'20/08/23

聖書箇所: マルコの福音書 2 章 13-17 節 (新約 p.67)

皆さんは、誰かから疎外されたり、あるいは、差別されたりしたことがあるでしょうか? 「お前なんか要らない! お前なんか、あっちへ行っちゃえ! 」といったようなことは、幾つになっても辛いものであると思います…。しかし、私たち人間は、往々にして、そのようなことをしてしまう罪深い存在なのではないでしょうか? 差別をされて、悲しい思いをするのも人間…。また逆に、差別をして、悲しい思いをさせてしまうのも、これまた私たち人間です。実際、ここにおられる皆さんも、1度や2度は、そういったような辛い経験をされたことがあるのではないのでしょうか?

## 命題: イエス様は、どのような者たちのことを招いてくださっているのでしょうか?

今回のみことばには、当時、ひどい差別と言うか…。残念な扱いを受けていた者たちのことが載っています。それが、所謂、『**取税人**』であります。2000 年前の、この当時は、誰もが取税人たちのことを毛嫌いし、彼らのことを顧みようとする者はほとんどおりませんでした。しかし、イエス様は違いました…。それだけでなく、イエス様は、そのことを通して、大切な「真理」を教えてくださいました。

そこで、今日は、イエス様が、どのような者たちのことを、ご自分の方へと招いてくださっているのか? ということについて学んでいきたいと思えます。そうすることによって、私たちの、イエス様に対する姿勢というものが、ますます正されて…。私たちのような者たちのことを招いてくださったイエス様の期待に沿っていくことができるようになっていけることを願うものであります。どうぞ、今日の聖書箇所である、マルコ 2:13 以降をお開きください。

## I・すべてを捨てても、イエス様についていこうとする者! (13-14 節)

このみことばが私たちに教えてくれていますことは、『レビ』という取税人が、イエス様の招きに答えて、すぐに、何もかも捨ててイエス様に従ったということでもあります。そのことから、**イエス様は、すべてを捨てても、ご自分に“ついていこう”とするような者を欲しておられるのだ!** ということを確認していきたいと思えます。どうぞ、まずは、13-14 節をご覧ください。

13 イエスはまた湖のほとりに出て行かれた。すると群衆がみな、みもとにやって来たので、彼らに教えられた。

14 イエスは、道を通りながら、アルパヨの子レビが収税所にすわっているのをご覧になって、「わたしについて来なさい」と言われた。すると彼は立ち上がって従った。

### ●この当時の取税人たちに対する扱い

初めに言っておきたいことは、多分、今日私たちは、ほとんど新しいことを学ぶことは無いでしょう。…と云いますのは、今日、私たちが学ぼうとしていることは、あまりにも、当たり前…。皆さんが、よく理解してくださっているはずの内容だからです。…でも、私たちが頭で理解できていることと…。私たちが、そういったことを、本当の意味で理解できているかどうか…。あるいは、ちゃんと実践できているかどうかは、別の話です。どうか、皆さんには、この機会に、聖書が教えてくれている、3つの条件に自分が適っているかどうかを、吟味していただきたいと思えます。

このみことばには、かつて、イエス様が選ばれたあの「12 弟子」であり…。また、「マタイの福音書」を書き記した、取税人マタイが召命された時の経緯について記されています。そうです、ここ 12 節に出てくる『**アルパヨの子レビ**』というのは、あの取税人マタイのことなのです。そういったことは、平行記事であるマ

タイ 9 章を見てくださるとよく分かります。そのマタイが、イエス様についていったという、その決心の“大きさ”を正しく理解するためには、まず、この当時のことを知る必要があります。

実は、この当時、ユダヤを始め、その周辺諸国は、「ローマ帝国」という強大な国によって脅かされてきました。そのローマは、自分たちが支配していた属国から税金を徴収するに当たって、所謂、入札のようなことをさせて…。その地域地域で、最高の入札額を入れたグループに、その地域の税金を徴収する権利を売ったらしいのです。すると、その税金を徴収する権利を手に入れた者たちは、少しでも多く、自分たちが払ったお金を取り戻そうとして、民衆たちから、少しでも多くの税金を取り立てようとするわけです。それが、今日のみことばに出てくる“取税人”であります。

その取税人たちは、町の大通りなどで行き交う人々を、勝手気ままに引き止めて、彼らの荷物を開けさせては、好き好きの金額の税金を取り立てていきました。しかも、民衆たちが、その税金を支払うことができない場合は、自分の財力に物を言わせて、そこに高い利子を付けて、一旦、お金を貸して、ますます、その相手から、たくさんの金品を奪っていったのだそうです。そういったわけで、大抵の取税人たちは、不正のゆえ、金銭的には恵まれていたようです。

実際、今日のみことばにでてくる、アルパヨの子レビと言うか、マタイも大きな家に住んでいて…。かなり裕福であったようなことが、平行記事からもうかがえます。また、ルカ 19 章に記されているザアカイの記事を読んでみても、そこに、彼が、『**金持ちであった…**』(ルカ 19:2)ということが教えられています。

そういったことから、当時、取税人は、盗賊や人殺し、遊女などと同類である、と考えられていました。実は、彼ら取税人が、神をあがめ、みことばを学ぼうとしても、会堂にすら入ることが許されていなかったそうです。それどころか、彼ら取税人たちは、真の神に逆らうローマの手先となって、自分たちの民を裏切って…。しかも、不正に富をなしていたわけですから…。民衆たちが、取税人たちのことをころよく思うはずがありません。そういった職業に、今日のみことばの、『**アルパヨの子レビ**』、つまり、マタイが就いていたわけです。

### ●イエス様がおっしゃられた内容とは?

さて、そんな時に、イエス様とレビとは出会ったわけでありです。前回も学んだように、そのイエス様は、この地上に来られて…。大勢の者たちを癒すために、たくさんの奇蹟を行われたのは、ありませんでした。「イエス様の優先順位」からも学んだように、イエス様にとって、1番の優先順位は、人々を癒すことではなく…。福音のメッセージを語っていくこと…。人々が救われることであつたのです!

さて、そのイエス様が、収税所で座って、税金を取り立てていたであろう『**レビ**』、所謂、マタイに目を留めます。今日のみことばの 14 節、『**イエスは、道を通りながら、アルパヨの子レビが収税所にすわっているのをご覧になって…**』という部分を見てみると、何だか、イエス様はマタイのことを偶然、見かけたという風に思われるかも知れませんが…。実は、この表現を、ルカ 5:27 では、『**目を留めて…**』という表現を使っています。実は、この『**目を留める**』(θεωμαί)という単語は、「ただ単に、目が留まった。たまたま、そこに目が行った。」というような意味ではなくて、「じっと見る、見つめる、熟視する…」というようなことを表わす時に使われる言葉なのです。

つまり、この時、イエス様は、レビのことを…。つまり、マタイのことをじっと見つめられたのです。それは、イエス様が、このマタイのことをご存知であつたからです。私たちの救い主であられ…。もちろん、神でもあられるイエス様は、すべてのことをご存じです。だから、前回学んだみことばでも、中風をわずらっていた者が、罪の故に…。その病の故に苦しんでいたことを、イエス様は当然、ご存じであつたのです。そして、この時も…。イエス様は、このマタイが何か満たされていないことを、これまた、ご存じであつたのです。

イエス様は、そのマタイをじっと見つめて…。そして、『**わたしについて来なさい…**』と言って、当時、取税人であつたマタイのことを、特別な働きのために召してくださいました…。そのような…。イエス様の招き

に対して、このマタイは、大変な決心をします。それが、14 節、『すると彼は立ち上がって従った。』とある通り、彼は、この“取税人”という金のなる職業を辞めて、イエス様に従ったのです。実際、この平行記事であるルカ 5 章では、『…レビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った。』と記されています。

このことは、私たちが少し前に学んだ…、ペテロとアンデレが召された場合と非常に似通っている気がします。ペテロたちの場合も、「彼らは、イエス様から召されてすぐ、何もかも捨てて、イエスに従った。」と書かれてあるように、すべてを捨てて、その上で、イエス様に従っていったのです。

しかし、みことばには同じように書かれていても…、このペテロの場合と、今日のマタイの場合とは、大きく違うところがあります。それは、マタイの場合、もう2度と取税人には戻れない、ということでもあります。…と言いますのは、ペテロの場合、漁師を辞めて、舟や網を捨ててしまっても、もう1度、舟や網を手に入れることができれば、どこでだって、漁師をすることができます。現に、ペテロは、ヨハネ 21 章で、イエス様の十字架と復活の後、また、ガリラヤ湖で漁をしていた姿を見ることができます。

しかし、マタイの場合、1度、取税人を辞めてしまったら、もうすぐに、彼の代わりが雇われてしまって、もう2度と取税人の仕事には就けなくなってしまいます。しかも、マタイが、その町で、何か別の仕事に就こうとしても…、自分たちの裏切り者であり…、町中の嫌われ者であったマタイのことを、誰が雇ってやろうとするでしょうか？そう考えますと、この時、マタイがイエス様に従ったということの、決心の大きさをうかがい知ることができます。しかし、マタイは、それをしたのです！イエス様は、このような者を召し…、このような献身というものを、私たちに望んでおられるのではないのでしょうか？

#### ●他のみことばからの検証

そのことに関連して…、皆さんは、こんな出来事を覚えてくださっているでしょうか？⇒これは、ルカ 13 章に記されている記事なのですが、ある時に、イエス様に対して、『主よ。救われる者は少ないのですか？』(ルカ 13:23)と質問する者がありました。すると、イエス様は、それに対して、『努力して狭い門から入りなさい。なぜなら、あなたがたに言いますが、入ろうとしても、入れなくなる人が多いのですから。』(ルカ 13:24)とお答えになられたのです。このように…、救いというものは、ある方たちが考えておられるように、決して、簡単なこと…、そうたやすいことではありません。

だから、イエス様は、ルカ 14:27 でも、『自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。』ということをおっしゃったのです。ここで言われている、『弟子』とは、所謂、牧師や宣教師と言ったような、特別な働き人のことを言っているわけではありません。…と言うのは、例えば、『19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。』(マタイ 28:19-20)と言われた、あの“大宣教命令”は、福音のメッセージを語って行って、“救われる人々”を起こしていきなさい！というメッセージであって…、決して、牧師や宣教師といったようなフルタイムの働き人を起こしていきなさい、というようなメッセージではなかったはず。そうでしょ？…このように、イエス様は、すべての信者に、“すべてを捨てて、神様に従う！”という風な献身を願っておられるのではないのでしょうか？

## Ⅱ・イエス様のことを証ししようとする者！(15-16 節)

次のポイントを見ていきましょう。イエス様が喜んで招いてくださるのは、このイエス様のことを、喜んで、“証し”しようとする者であります。それは、今回のみことばで見るレビにしても、そうですが、聖書の中の至るところで見ていくことができます。そのように、本当に救われた者は皆、自分が信じた、このイエス様のことを“証し”しないではいられないのです。今日のみことばの 15-16 節には、こう記されています。

15 それから、イエスは、彼の家で食卓に着かれた。取税人や罪人たちも大ぜい、イエスや弟子たちといっしょに食卓に着いていた。こういう人たちが大ぜいいて、イエスに従っていたのである。

16 パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちといっしょに食事をしておられるのを見て、イエスの弟子たちにこう言った。「なぜ、あの人は取税人や罪人たちといっしょに食事をするのですか。」

#### ●レビ(=マタイ)の思い

今読んだ箇所にも、この時、召されたレビの感情というものを見ることができます。…と言いますのも、レビ、つまり、マタイは、決して、渋々、イエス様に従ったのでは無いからです。もし、マタイがイエス様に従いたくなかったのなら、イエス様から、『わたしについて来なさい…』と言われた、その時点で、マタイは断ることもできたわけです…。しかし、この時、マタイが、取税人を辞めてまでイエス様に従ったということを考えてみると、彼が、よほどの決心をして、イエス様に従っていったことが分かります。そんなマタイに後悔などあるはずがありません。

後悔どころか、この時のマタイにあったものは、喜びや感謝といったような、前向きな感情でありました。だから、マタイは、そのことを自分の仲間たちに伝えたくて、パーティのような催しを開いて…、そこに大勢の者たちを招待したわけです。…そうでしょ？

#### ●パリサイ人や律法学者たちの疑問？批判？

しかし、マタイの、そのような行動を理解できない者たちが居りました。それが、当時、民衆たちに、神のみことばである聖書を教え、律法を教えていたパリサイ人であり…、律法学者たちでありました。今日のみことばを見ても、『パリサイ派の律法学者たち』が、イエス様と取税人たちが一緒に食事をしているのを見て、文句を言っている様子が描かれています。

これまた、この当時の歴史的な経緯を説明いたしますと、この当時から数百年も前のこと、この当時のユダヤ人たちが、捕囚されていたバビロンから還ってきた後、その中の敬虔な者たちは、自分たちの国が滅ぼされたのは、自分たちが神との契約に背いて、様々な不信の罪(Ⅰ歴代誌 9:1)に走ってしまったからだということに気がきます。そこで、彼らは、イスラエルに帰国した後、律法の教えを厳格に守って、異教の教えを徹底的に排除しようと試みます。そういったことを1番に主張したのが、「パリサイ派」と言われる者たちでありました。この、「パリサイ」という言葉は、彼らの主張した「分離する」という言葉から来ているそうです。

ですから、このパリサイ人たちと言いますのは、元々は、律法の教えに従い、極めて良心的な生き方をしている人たちでありました。ところが、段々と時が経つにつれて…、彼らが「律法」と言う場合、それは、旧約聖書の“みことばだけでなく”、彼らの律法解釈に基づいた伝承も、律法と同じように扱われ、それに従うべきことを主張するようになりました。だから、彼らのみことばの理解や、その主張が、次第に、みことばから離れていってしまったのです。イエス様は、パリサイ人たちの間違いを指摘して…、彼らのことを、『偽善』(マタイ 23 章)であるとか…、また、『あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている。…あなたがたは、自分たちの言い伝えを守るために、よくも神の戒めをないがしろにしたものです。』(マルコ 7:8-9)と言って、厳しく非難されました。

彼らパリサイ人たちが犯してしまった過ちとは、まさしく、現代のカトリック教会が犯してしまったものと、ほとんど同じであると言って良いと思われます。現代のカトリック教会も、また、聖書のみことばだけでなく…、そのみことばを解釈した人間の考えや会議での決定事項などにも、神の言葉と同等の権威がある！として、その結果、黙示録 22:18 のみことばに背いて、『私は、この書の預言のみことばを聞くすべての者にあかしする。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害をその人に加えられ。』という警告に背いてしまっているのです。



どうぞ、今日のみことばに戻っていただきまして…、そんなパリサイ人たちが、イエス様の弟子たちに向かって、つぶやいたとあります。それは、16 節にありますように、『なぜ、あの人は取税人や罪人たちといしょに食事をするのですか。』というようなものでした。それはつまり、彼らパリサイ人たちの主義・主張であった、「分離する」という原則から外れた行為であったからです。彼らは、律法のみことばに逆らって、罪を犯し続けている取税人や罪人たちを、受け入れることがどうしてもできなかったのです。

彼らパリサイ人たちが心の奥底で持っていた考えは、前回も紹介したように、「自分たちこそは、立派な良い人間である…。私たちは、その良い行ないのゆえに、救われるに違いない…」というものでした。だから、イエス様は、ルカ 18 章で、「パリサイ人と取税人」というような例えをもって、彼らが犯していた間違いや、神様が1番に願っておられることを明らかにしてくださったのです。

では、果たして、私たちは、神様のみことばというものを正しく理解できていますでしょうか？…ここ日本のキリスト教会にあっては、イザヤ 43:4 の『わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。…』というみことばが誤用されて(＝間違っ、解釈されて)しまっ、私たちが価値があるから救われた！とか、未信者に対しても、「あなたのことを、神様は価値ある者として見てくださっていますよ！」というようなメッセージが語られてしまっ、…実は、つい最近、SNS で、ある方と話したのですが、イザヤ 43:4 の誤った解釈というのは、アメリカでは聖書解釈の教科書に出てくるような…、間違っ、聖書解釈の代表のような、みことばらしいのです。…でも、「そんなことは、ほとんど聞いたことが無い…」というのが、ここ日本のキリスト教会の現状です。ひょっとしたら、現代の教会もまた、純粋なみことば以外の教えを、知らず知らずの内に取り込んでしまっ、ではないでしょうか？

いえ、それだけではありません。ここ日本では、私たちクリスチャンが、“正しい聖書解釈”について議論しようとする、イエス様は、裁いてはいけません、と言われた！(＝中途半端な理解)と言っ、ほとんどのクリスチャンが、真剣に話し合っ、議論を戦わせっ、まともな意見を交換することさえできません。それが、日本のキリスト教会の現状です。どうか、皆さんには、しっかりと、聖書のみことばを見極め、神様のみことばがどういったところにあるのか、よく理解していただきたいと思っ。

### Ⅲ・自分が罪人であるということ、**自覚**している者(17 節)

最後、3つ目に確認してきたいことは、イエス様が招いておられるのは、自分が真の神の前に罪人であるということ、**“自覚”している者**である、ということです。どうぞ、今日のみことばの 17 節をご覧ください。

17 イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

#### ●パリサイ人たちの批判に対するイエス様の答え

パリサイ人たちの批判に対して、イエス様は、非常に有名なことばを残されます。それが、ここ 17 節のみことばです。⇒このみことばは、非常にシンプルかつ、明快です。自分のことを病人…、つまり、自分が問題を抱えているということを理解し、それを受け入れた者でなければ、医者が必要とはしません。

そのように、イエス様は、自分のことを正しい！と自惚れている者たちのためではなく…、自分のことを罪人である！ということ、**“自覚”している者**たちに、より多くの関心を持ってくださっているのです。皆さんは、覚えてくださっているでしょうか？昔学んだ、マタイ 5 章の、「山上の説教」と呼ばれる、イエス様が語ってくださった有名なメッセージで、イエス様は、そこで、1番最初に、『心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。』(マタイ 5:3)ということをお教えしてくださりました。

そのメッセージで、イエス様が言わんとおられることは、こういうことでした。「自分が罪に汚れて…、もう自分では、どうしようもないところまで来てしまっ、自分では、どうしたって、自分のことを救えっ、…」そのことに気付いた者だけが、天国に行くことができる…、つまり、救われる、ということです。…と言うのは、そういったことを本当に気付かせてくださるのは、神様の導きであるからです。そうして、そのことに気付かされた者は、ただ神の憐れみに…、神の恵みにすがろうとするのです。

そういう意味におきまして、この当時では、自分の正しい行ないの故に、「私は正しい人間だ！私は救われている！」と思っ、込められたパリサイ人たちに比べ、取税人たちが、ある意味、救いには近かったと言っ、のです。だから、イエス様は、パリサイ人たちや律法学者たちよりも、むしろ、取税人たちや罪人たちと時間を取られ…、彼らに、福音のメッセージを語ってくださったのです。

#### ●本当の意味で、イエス様が招いてくださっている人々とは？

しかし、皆さん、気付いてくださいますか？…今日のみことばの 17 節で、イエス様は、取税人や罪人たちだけでなく…、パリサイ人たちや律法学者たちに対しても、福音のメッセージ…、つまり、自分自身の罪を認め…、悔い改めなければならぬ！ということをお教えしてくださったのです。だっ、ここ 17 節のみことばを、イエス様は、何より、律法学者たちに対して、語ってくださったわけでしょう？…イエス様は、律法学者たちにも救われてほしかっ、のです！

そういう意味におきまして…、イエス様が招いてくださっているのは、何も、取税人や当時罪人と呼ばれていた者たちだけではなく…、パリサイ人や律法学者たちをも含む、すべての人を、イエス様は招いてくださっているのです。だっ、すべての人が、造り主である神を忘れ…、すべての者たちが虚しい人生を送り…、すべての人間たちが、神の裁きに向かってしまっ、しているからです。救いが必要無いなんていう人は居ません！

Ⅱペテロ 3:9 で、『主は、ある人たちがおそいと思っ、るように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであっ、ひとりでも減びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。』とありますように、神は、全ての人が救われることを願っ、救いへと招いてくださっているのです。

パリサイ人たちや律法学者たちは、「自分たちも、また、罪という病を抱え込んでしまっ、している…。私は、神様の律法を守ろうとしてきたけれども、どうしたって完全には守り得えなかつ、…。私も罪人だ！私にも、取税人たちと同様、救いが必要だ！」ということをお気付かなければならなかつ、のです！そうでしょ？

#### <励ましの言葉>

ですから、どうぞ…、まだ、救いを手にしておられない皆さん。1日も早く、この救いを、ご自分のものとしてくださいますように、願っ、します。イエス様は、あなたを救うために…、ご自分のいのちを犠牲にして、十字架へかかっ、くださったのです！イエス様の受けられた苦しみは、本来なら、あなたが受けるべき苦しみであったのです。どうぞ、このイエス様を、あなたの神様…、あなたを救い出してくれる唯一の救い主であると信じて、この救いをご自分のものとしてくださいますように願っ、いたします。

また、皆さん。考えてみてください？イエス様を信じた、私たちクリスチャンは、もう救いを手にしたのだから…と言っ、ただ、呑気に、残された人生を歩んでしまっ、いても良いのでしょうか？⇒いいえ。そんなことを、神は願っ、おられません。神は、私たちが、神を第1として歩んでいくことを願っ、おられるのです。そうして、私たちが、この世の中にあっ、地の塩、世界の光として歩んでいく…、その生き方を通して、この神様を証しして…、そうして、この神の栄光を現していくことを願っ、おられるのです。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。

<sup>1</sup> マルコ 12:34 の表現、『あなたは神の国から遠くない。』を引用。